

二〇二二年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ずっと昔から、おじさんの養蜂場ようほうじょうへ遊びに行くのがぼくの夢だった。中学生になったら、一人でおいでと、おじさんはいつもさそってくれた。

いくらさそわれたからといって、雅也まさや一人で旅行なんて無謀むぼうだと、しばらくのあいだ、父さんは反対していた。

「発達障害」という言葉が、あの人の頭の中から、はなれな  
いのかな。

母さんは、ぼくをかばってくれる代わりに、障害を認めない。だから旅行には行かせてくれたけど、それがいいことなのかどうか、ぼくにはわからない。

ぼくにとって、それもやっぱり息苦しいことに変わりはない。

父さんがいつも行き着くところは、「どうして雅也は、こんなふうになってしまったんだ」という、だれも答えやうのない場所だ。

その言葉を聞くたびに、ぼくは底なし沼ぬまにズンズンしずんでいく。

授業中は授業に集中しましょう。

相手の気持ちを考えて話しましょう。

ぼくはそのどちらも苦手だ。

\* みつばちマーヤのように、ぼくにも羽があつて、広い世界に飛び立てたらしいのに。

「――北の太陽という家だけだ」

おじさんの声が、音量を増して耳にせまってきた。

「えっ？ 太陽って、なにが？」

「また人の話を、聞いてなかったな」

「へへっ」

笑ってごまかしても、おじさんはいやな顔ひとつしな  
い。

「もう一度言うから。今度は耳の穴かっぽじって聞くん  
ぞ」

「うん」

「この前電話では、おじさんたちといっしょに、養蜂場に  
寝泊ねとまりしてもらうって言ってたけど、予定が変わった」

「どういうこと？」

「大学生が一人、泊まりこみで手伝いに来てくれることにな  
って、雅也の寝るスペースがなくなった」

「ぼくの寝る場所がないの？」

「そうなんだ。それで近くに、北の太陽って家があるから、そこに寝泊まりしてもらおうと思ってる」

「そんな話、聞いてない」

「だから、いま話してる」

「じゃあ、みつばちの世話とか、できないってこと？」

「そんなことないさ。ぜひ手伝ってもらわなきゃ」

窓の外を見ると、広い道路わきに、桜の木が緑の葉をゆらし、ずらつと並んでいた。真っ赤なサルビアも見えた。

少しずつ、山が近づいてきた。

考えて、考えて、ぼくはいい方法を思いついた。

「そうだよ。その大学生の人を、北の太陽ってここに」

「それはむりだ」

「どうして？」

「だって、大学生のお兄さんにはしっかり仕事をしてもらわなきゃいけない」

「仕事ならほくだって」

「毎朝、三時起きだぞ」

「三時……」

「ただの手伝いなら、きょうは眠いからむりですってすませられるけど、仕事となればべつだ。おじさんたちは、花

とみつばちに合わせて生きているんだからな。言ってみれば、自然に命をあずけている」

おじさんの表情がきびしくて——たぶんそれは、ぼくに

対してじゃなくて仕事に対してのきびしさだと思うけど

——それ以上は、<sup>A</sup>どうしても強気になれなかった。

「北の太陽って、どんな場所なの？」

決心がつくと、そちらが気になった。

「旅館？ 民宿？」

「普通の家さ。ちよつと子どもが多いかな」

「多いつて？」

「いま五人かな」

「五人も」

「そうぞうしいかもしれないが、雅也が前に、兄弟がほし

いって言ってたから、ちよつどいいだろうと思つてな」

「そんなの、兄弟とは言わないよ。おじさんだって、ぼく

が集団の中でうまくやっていけないこと、知ってるだろ。

学校にいたつて、なぜだかみんな、ぼくの周りからいなくなる。仲良くしたいのに、おこらせてしまう」

「わかつてる。しかし、そこは学校じゃないし」

「ぼく、自信ないよ。いまのクラスだつて友だちは一人も

できないし。いまだけじゃない。幼稚園のときだって、小学校のときだって、みんなぼくから逃げていくんだよ。へんなやつとか、危ないやつとか言って

「いすを投げたりしたからだろ」

「あいつは、ぼくのくつをかくした」

「はははっ。そうだった、そいつが悪い」

おじさんが目じりのしわを見せつけるように、ニッコリ笑った。

「そうだ。部屋は一人部屋が空いてるって、志保子さんが言ってた」

「志保子さんって、だれ？」

「谷村志保子さん。北の太陽を運営してる人」

「運営？」

「X じゃないの？」

「X だと思いか思わないかは、いっしょに暮らしてから、自分で決めればいい」

「ほかに、選択肢はないの？」

B  
ぼくは、みつばちマーヤに笑われそうなくらい、弱気になっていた。

「ない。どちらにしても、もう到着する。それから考えても、いいんじゃないかな」

車が枝道に入ると、正面に白い家が見えた。洋館のようで、その奥へと続く森の緑によく映えていた。

柵も塀もない開放的な敷地に、おじさんは車をとめた。

(中略)

「北の太陽」には、海鳴(中1、雅也と同じ)、杏奈(小5)、ゆず(小3)、瑛介(小1)、麻央(5歳)の五人の子どもがいた。

志保子さんが、ダイニングにみんなを集めた。

\*さかえ  
栄さんは、夕飯の準備をするため、買い物に出かけている。

開けた窓から風が入る。エアコンはあるけど、まだ動いたところは見ていない。

みんなが、夕飯のときと同じ場所にすわる。

志保子さんがいつものものにこやかな表情で、みんなの顔をゆっくりとながめた。

瑛介は、テーブルの下で、さつきから足踏みしている。帰りの車の中でせっかくなか海鳴と外で遊ぶ約束をしたのに、

と不満をもらす。

「さてみなさん。きょうの午前中、杏奈、ゆず、麻央ちゃんの三人は、ピアノを教えてもらいに行きました。そこで先生に、秋の発表会に出てみませんか、さそっていただきます。それだけ、一生懸命に、練習をしているという事です」

「わあー。よかったね」

声を上げたのは、瑛介だった。なのに女の子たちは瑛介の声に、むしろうつむいてしまった。

いやな予感がする。

志保子さんは「ところが」と、ひと呼吸おく。

「困ったことに、その発表会に、ドレスを着たいと、杏奈とゆずが言い出しました」

「だって、みんなドレスを着て演奏するって言った」

「みんな？ 本当ですか、杏奈？」

「そうよ。みんな、ドレスを着るって。ね、ゆず」

「う、うん」

「先生も、なるべくドレスがいいって」

語気を強めて、杏奈が主張するということは、志保子さんから、反対されたってことか。

「それはへんですね。わたしが先生に電話をして聞いたら、制服やふだん着で参加する子もいると、おっしゃっていました」

「ズルいよ。電話するとか！」

杏奈がどなる。

ゆずはチラッと、志保子さんを横目でにらむ。

「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」

杏奈は折れる気はないみたいだ。

ぼくたち男子三人は、なんとなく、ぼかんと聞いていた。どうしてもめているのか、かんじんなところがわからない。

「志保子さん。ドレスだと、どうしてもだめなんですか？」

これくらいなら、口をはさんでもかまわないだろうと、ぼくは聞いた。

「いくらかかるのかは、わかりませんが、そういった予算はここにはないということですよ」

「よさんって、なに？」

瑛介がきょとんとした目を海鳴に向けた。

「お金だよ。瑛介がほしいおもちゃがあっても、お金がな

きゃ買えないだろ」

「そういうことです」

志保子さんが、うなずきながら、女の子たちを見る。

「買うんじゃない、借りるの」

「どちらにしても、そういうわがままを言われると困ります」

「こんなのが、わがままですか？」

「ここではそうです」

「じゃあ、もう発表会に出るのあきらめる」

杏奈がふてくされる。

ちよつとかわいそうに思えた。発表会にドレスを着るなんて、普通にやってる家庭はたくさんあるのに。やっぱりここは、普通の家とは呼べない。

「いいですか。発表会に出るなどは言ってません。ドレスも用意していただけないか、福祉協議会や、ボランティアアセンターに問い合わせてみます」

「そんなのいや。ちゃんとしたのがいい」

「杏奈。ちゃんとしたのとは、どういう意味ですか」

「だから、お店に並んでる中から自分で選びたい。ピアノ教室に、パンフレットもあったよ。段ボールに入った服は

もういや」

「ちゃんと新しい服も買っているでしょ」

「でも、みんなそんなふうには思っていない。ずっとどこかの倉庫の奥に、何年も眠ってたやつで、安い洗剤とほこりのおいしけしないって、そう思ってる」

「なんですか。多くの善意を、踏みにするような言い方をして」

「わたしが言ってるんじゃない！」

志保子さんにたしなめられたとたん、杏奈が鋭利な刃物のような目つきになった。

「学校で言われているよ。くんくんくん、安い洗剤のにおいがするって。いままで志保子さんや栄さんに悪いと思っ、だまっていたけど」

よほどがまんしていたんだろう。杏奈のひとみから、なみだ涙があふれた。

志保子さんもだまってしまった。

重い空気が立ちこめる。

「ねえ、杏奈、知ってる？」

海鳴は、ここは年長の自分が、どうにかしなきゃと思っただのだから、やさしい声で話しかけた。

「みつばちマーヤの冒険ぼうけんの中に、こんながある。——運命がひきはなしたものを、またいっしょにはならぬよ、という、ばらこがねのクルトのセリフ。

「どういふことだと思ふ？　ぼくはこう思う。ぼくたちは、ぜいたくとはけつしていっしょになれない運命なんだ。だからぜいたくを知つてしまうと、いつか身をほろぼすことになる。もちろん将来、自分の力でぜいたくできる境遇きようぐうになれたら、それはいいと思ふけど」

「ドレスを着るつて、ぜいたくなの？」  
目を真つ赤にして杏奈はうったえる。

「いまのぼくたちにはね」

海鳴は、きぜんと答える。ぼくは胸が苦しくなつた。

海鳴がぼくを見て言った。

「雅也はどう思う？」

「えつ、ぼくの意見？」

「だつて、北の太陽の一員だもん」

海鳴は平然と言うけど、ぼくには答える準備もなければ、経験もなかつた。

杏奈やゆずが、ドレスを着たい気持ちは理解できる。でもお金の問題となると、話はちがってくる。

海鳴は志保子さんにも気をつかっているのだろう。そう考えると、ここで自分の考えを主張するなんて、こっけいな気がする。

「もしかして、自分の気持ちはないの？」

「いや、そんなことないけど」

「自分の意見に、自信がないとか？」

「それは……あるかも」

ぼくの意見は、よくクラスの和を乱した。

「話しても、だれかを不快にしてしまうかも。そう考えると、話すことに意味があるのになつて、そう思う」

「それでも、わかりあうためには、言葉にするしかないと思う。ここではみんなが自由に発言できる。みんな同じ太陽の下にいる。だから、もしなにか思っているなら、話して」

ぼくはとてもうれしかった。いままで自分の言葉を、みんなにいいないにあつかつてくれたのは、両親とおじさんだけだ。

「それなら言わせてもらうけど、ドレスは着せてあげたい。それはあたりまえの感情だし、かなえてあげるの、大人の責任だと思う。たとえドレスが似合わないとして

も」

ふっと、海鳴が吹き出した。

「えっ、なにかおかしい？」

「あ、いや。それでいいよ」

応援おうえんしたつもりが、杏奈もゆずも、ぼくをいやそうな目で見る。

「ねえ、志保子さん。お金なら借りればいいじゃないですか」

ぼくなり考えて言った。

「そういうくせを、いまからつけてほしくありません」

志保さんはがんとして、意志を曲げる気はないみたいだ。

「瑛介はどう思う？」

海鳴が聞くと、

「ぼくもドレス、きてみたい」

と、的外れなことを言って笑わせた。

みんなの気持ちがふっとほぐれると、それを機に、

「まだ三か月前ですから、ゆっくり考えましょう」

志保しほさんが、長期戦をほのめかした。杏奈たちが妥協きようしたり、ましてや忘れるなんてことはないだろうけど。

(村上しいこ『みつばちと少年』による)

### 【注】

\*みつばちマーヤ——児童文学作品『みつばちマーヤの冒

険』の主人公。雅也と北の太陽の子

どもたちの愛読書。

\*栄さん——志保しほさんの娘。「北の太陽」を手伝って

る。

問一 — 線部 A「それ以上は、どうしても強気になれなかった」とあるが、それはなぜか。理由を説明しなさい。

問二 空欄 

X
---

 にあてはまることばを、文中から四字で書き抜いて答えなさい。

問三 — 線部 B「ぼくは、みつばちマーヤに笑われそうなくらい、弱気になっていた」とあるが、雅也が弱気になるのは、自分のことをどのように思っているからか。最もよくあらわしたことを、文中から十五字で書き抜いて答えなさい。

問四 — 線部 C「でも、制服で出るのは、男子だし。ふだん着の子は、ふだんから一生懸命に練習してない」とあるが、この発言で杏奈が伝えたいことは何か。「権利」ということばを使って説明しなさい。

問五 — 線部 D「志保子さんもだまってしまった」とあるが、それはなぜか。理由を説明しなさい。

問六 — 線部E「きげんと」とあるが、このことばの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 意志が強く感じられる様子でしつかりと
- イ どうしても自分の意見を押し通すように
- ウ 不満を抱いたままの様子でふてくされて
- エ 周りの人の様子をうかがいながら慎重しんちょうに

問七 — 線部F「ぼくは胸が苦しくなった」とあるが、それはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 杏奈や海鳴が大人である志保子さんも交えて自分の意見をしっかりと知っているのを見て、自分の意見もうまく言えるか不安に思ったから。
- イ 子どもたちではどうすることもできない経済的な状況じょうきょうによってドレスをあきらめるしかないという意見に、やりきれない気持ちになったから。
- ウ ぜいたくとはいっしょになれないという運命を受け入れるしかない北の太陽の一員に、今は自分が入っていることにいらだちをおぼえたから。
- エ 目を真っ赤にしてドレスを着たいと言う杏奈がとてもわがままに思え、海鳴の意見をもっともだと思ひ、志保子さんがかわいそうになったから。

問八 — 線部 G「それなら言わせてもらおうけど」とあるが、それまで自分の意見を言うことに消極的だった雅也が、意見を言えるようになったのはなぜか。雅也の気持ちの変化を中心に、七十五字以内で説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あなたのふるさとはどこですか？」

いま自分が暮らしているまちがふるさとだという人もたくさんいるでしょう。他の地域に引越したけれど、自分が生まれ育ったまちがふるさとだと考えている人も多いと思います。都会で生まれ育った人にとっては、おじいちゃんやおばあちゃんが暮らしている両親の田舎(出身地)をふるさとだと感じている人もいられるかもしれません。

では、「ふるさと」という言葉からどんなイメージが思い起こされるでしょうか？ 自然に囲まれた緑豊かな風景、都会では味わうことのできない郷土料理、大人も子どもも参加するお祭りなどの伝統行事、会えば気軽にあいさつが交わされるご近所同士の親密なつながり……。そういった有形無形の財産が日本のふるさとはたくさん残されています。

そんな素晴らしい日本のふるさとが、いままさに歴史的とも言える大きな転換期を迎えています。

たとえば、地方のまちの商店街。三〇年くらい前まで、そこは地元の人たちが集まる活気に満ちた場所でした。し

かし、日本の各地の商店街は空き店舗がどんどん増え、締め切った店が軒を連ねるシャッター街々となってしまうところがたくさんあります。夕方六時を過ぎると照明が消えてしまうアーケードも珍しくありません。

Aなぜ、商店街はさびれてしまったのか？ 価値が多様化し、次から次へと新製品が生まれてくる時代になったことで、何を仕入れて店頭に並べればお客さんに満足してもらえるかが見えにくくなったことも一因とされています。その結果、商店街の店主は、普段から店に足を運んでくれる人だけに向けた商品しか扱わないようになる。これでは、新たなお客さんを獲得することはできなくなっています。

1、次から次へと生み出される新製品を求めるお客さんは、どこで買い物をするのか？ 一九八〇年代以降、地方都市の郊外に大型のショッピングセンターが続々とつくられました。大手企業が経営するショッピングセンターは、若い人たちの消費動向を分析し、魅力的な新製品を広い店内に大量に並べます。しかも敷地には大きな駐車場もある。買い物客は、市街地の商店街を素通りし、欲しいものがほとんど揃っている郊外のショッピング

センターへと車で出かけていくようになっていきました。

2、最近では買い物のために郊外型のショッピングセンターにすら行かない人たちが出てきました。インターネット上には、大規模ショッピングセンターをはるかに凌ぐ超巨大な売り場があるからです。洋服も、本も、日常雑貨も、食品も、画面をクリックするだけで買え、なおかつ自宅まで配達してもらえるようになった。

時代の経過とともに、たしかに便利になったことは事実です。でも、この三〇年の間に誰もが便利になったわけではないのです。自分のふるさとおじいちゃんやおばあちゃんがいる人は考えてみてください。車もパソコンも使えないおじいちゃんやおばあちゃんにとって、郊外のショッピングセンターに出かけたり、インターネットで買い物したりすることは、簡単なことでしょうか？

高齢者の買い物を、歩いて通える地元の商店街が支える。3、高齢者がインターネットの便利さを享受できるように若い世代が手助けをする。そして、高齢者が培ってきた英知や経験が、若い世代の人生に引き継がれる。子どもからお年寄りまで、「そこに暮らしていること」に豊かさを感じられるコミュニティ——。

ふるさとは、そんな場所であって欲しいと僕は思うので

日本の内閣の中に「地方創生」を担う大臣のポストがつくられたのは二〇一四年九月。「元気で豊かな地方を創生するための施策を総合的に推進するため企画立案及び行政各部の所管する事務の調整担当」というのが、担当大臣の職務の正式な呼称です。ずいぶん長い名前ですね。

ともあれ、「地方を元気にしよう！」というのがこの国にとっての課題になっているわけで、その認識は非常に重要なのですが、政府が掲げている「人口減少に歯止めをかけよう」という方針に対しては、「ちょっと待てよ？」と思うのです。

この一〇〇年間で、日本の人口は三倍に膨らみました。しかし、山奥の村や小さな島といった中山間離島地域では過疎化が進み、人口は二〇〇八年の一億二八〇九万九〇〇人をピークに減り始めました。そして、増えたときと同じペースで、これからの日本の人口は減り続けるといわれています。総務省の「人口推計」では、二〇五〇年には一億人を割り込む見込みです。国立社会保障・人口問題研究

所のデータでは、二一〇〇年には五〇〇〇万人程度にまで減ると予測されています。

その予測があるなかで、「出生率を上げて人口減少に歯止めをかける」というのが政府の考え方です。はたして、それでいいのだろうか？

いまの日本は、人口が一億人いることを前提にした仕組みが数多くあります。一〇〇年前から始まった人口増加の流れの中でできあがった社会保障などの仕組みを維持したまま国を成長・発展させるには、人口を減らさない努力が必要になります。しかし、人口減少をやみくもに問題視するのではなく、減ることを「自然な変化」としてとらえるほうが、長期的には正しい選択ができるように思うのです。つまり、いまの国の仕組みを見直しながら、幸せに人口を減らしていくことができれば、新しい国のかたちが見えてくるのではないかと。

僕たちが解決しなければならない問題は、人口が減ること自体ではなく、減り方の中で生じる課題をどうやって見つけ、どう乗り越えていくかということです。その状況が、少なくとも二〇五〇年頃までは続くのです。

(中略)

二〇五〇年までの人口減少期において、はっきり見えている課題は二つあります。一つめは、すでに僕らが直面している人口の年齢的偏在<sup>＊へんざい</sup>。高齢者が増え、それを支える若い人たちが少ない状況<sup>じょうきょう</sup>を、どうやって乗り越えるか。

二つめは、これも始まっている人口の地域的偏在。生産年齢人口(一五〜六四歳)が大都市に集まり、地方に定住しない。これが、ふるさとの衰退<sup>すいたい</sup>にもつながっているわけです。

コミュニティデザイナーというのが僕の仕事です。これまでに一五〇を超える地域で活動してきましたが、「コミュニティデザイナーです」と名乗っても、「いったい何者だ？」と首を傾げられることがよくあります。とくに高齢の人にはピンとこない職業なのでしょう。ですから、こんなふう<sup>しんかうかい</sup>に自己紹介をするようにしています。

「みなさんの暮らしているまちが元気になるためのお手伝いをしています」

関わったまちのほとんどは中山間離島地域です。言ってみれば、全国各地のふるさとが僕の仕事のフィールドになります。

(中略)

デザイナーといいながら、モノをつくるわけではない。当初は、怪しい人間と思われることもありました。それでも、日本の各地で元氣を取り戻したふるさとの事例が現れてきたことで、コミュニティデザインという仕事への認知度も少しずつ高まってきました。そして、「モノ」ではなく「人と人とのつながり」でまちを元氣にする仕事に関心を抱く若い人たちも増え、二〇一四年四月には東北芸術工科大学に日本で初めての「コミュニティデザイン学科」も誕生しました。

「ふるさとを元氣にする仕事を生み出すこと」

これが、コミュニティデザイン学科の方針です。そして、学科長となった僕は、学生たちを指導しながら「頼もしい！」と感じています。

年配の有識者の方々と話をする、「人口は増えなければならぬ」「経済は上向きを維持しなければダメだ」という価値観が根強く残っていると感ずることが多々あります。戦後の日本の高度経済成長を知る世代は、成長戦略こそが豊かさへのシナリオだと考えているように思えて、

がっかりさせられることがしばしばです。

それに対して、いまの学生たちは「現実をしつかり見ています。一九九〇年代初頭に崩壊したバブル経済の幻想を再び追い求めることもなく、不景氣と言われる二一世紀を自分が置かれた日常としてとらえることができる。いわば、不景氣ネイティブです。だからこそ、人口が減り続けているこの時代にふさわしい、拡大路線とは異なる「豊かさ」というものを創造できるに違いないと僕は期待しているのです。

(山崎亮「ふるさとを元氣にする仕事」による)

#### 【注】

\*アーケード——天井を屋根などで覆った商店街。

\*動向——個人や社会がこれから動いていく傾向や方向のこと。

\*享受——利益などを受け取り自分のものとする。

\*中山間離島地域——農作物をつくるまとまった土地や人口が少ない山間部や離島を指す。

\*偏在——かたよってある場所にだけ多く存在すること。

問一 空欄

1

3

にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア あるいは      イ つまり      ウ では      エ ところが

問二 ——線部A「なぜ、商店街はさびれてしまったのか？」とあるが、その理由は何か。解答欄に合うように、文中から書き

抜いて答えなさい。

問三 ——線部B「豊かさを感じられるコミュニティ——」とあるが、筆者が期待する「豊かさ」の具体例として、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 高齢者が若者の力を必要としなくなり、インターネットで若者に人気の製品を自由に大量購入（くわんじゅう）できる。  
イ 高齢者のネット購入を手伝っていた若者が、廃品（はいひん）を上手（じょうず）に利用している高齢者の暮らしの知恵（ちえ）を学ぶ。  
ウ 高齢者よりも若者の人口増加を期待して大型スーパーを作り、売上げが伸びて街の経済力が上がる。  
エ 高齢者は家で、若者は大型ショッピングセンターで、世代ごとに場を分けて好みの買い物が自由に楽しめる。

問四 — 線部C「はたして、それでいいのだろうか？」とあるが、なぜそのように思ったのか。次の文の空欄にあてはまるふさわしいことばを、文中から書き抜いて答えなさい。

人口減少は、①ととらえて、②自体を問題としないで、③の中で生じる課題を見つけ、乗り越えることが大切だから。

問五 — 線部D「やみくもに」とあるが、このことばの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おそろおそろ      イ できるかぎり      ウ もらすことなく      エ わけもわからず

問六 — 線部E「頼もしい」とあるが、なぜ筆者は有識者よりも学生たちを頼もしいと感じるのか。「不景気ネイティブ」(ネイティブ⇨生まれながらの)ということばの意味を考えて説明しなさい。

問七 ……線部X「人と人とのつながり」でまちを元気にする」、Y「人口が減り続けているこの時代にふさわしい、拡大路線とは異なる『豊かさ』というものを創造できる」とあるが、人口が減少する中でふるさとに暮らすことの豊かさを、人々とのつながりから説明しなさい。

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① オウボウなふるまいをする。
- ② 教科書をロウドクする。
- ③ 顔ニンシヨウの機能がついている。
- ④ 問題のナンイドを上げる。
- ⑤ 彼かれに仕事をマカせる。

